研究の窓

ネクタイ

日本とアメリカ，双方の研究者たちが同じ課題について研究し，発表を行い，意見を交換することを通じて，主として東南アジア地域の疾病克服に資そうとする，いわゆる「日米医学協力」なる組織，活動がある。1965年，佐藤首相とジョンソン大統領との間で交わされた合意に基づいて発足したもので，38年の歴史がある。日米間，というよりは日本にとっての二国間で最も成功した協力の一つという評価を聞いたこともある。その中心となっている委員会は両国それぞれ7，8人の委員によって構成され，年に1，2回の会合をもつ。

そうした長い移り変わりの中で極く初期の，お互いにまだやや他人行儀であった頃の話である。ある時，ハワイで開かれた委員会の第1日，日本側の委員は全員ネクタイを締め，スーツ姿で席に着いた。ところがそれとは対照的に，アメリカ側に委員は1人のこらずアロハ・シャツで，いかにも寛いだ姿で勢揃いした。別に服装について誰が何を言うわけでもなく，和気あいあいのうちに研究の話をし，仕事の段取りを決め，無事，初日のプログラムをこなし，終えた。ところが一夜明けて2日目の朝，委員たちが再び会議場に集まってみると日本側は全員がアロハ・シャツで，アメリカ側はこれまた全員が背広姿であった。一同はお互いに顔を見合わせ，大笑いし，やがて肩を抱き合って互いの配慮をねぎらい，それが相互の友情を深める一つのきっかけともなった。

アメリカの大統領補佐官で，物理学の泰斗でもあるブロムレー教授と，当時ソ連の書記長に対するサイエンス・アドヴァイザーであったオシピアン教授が提唱して，G8それぞれの国で首脳直属の閣僚級科学技術顧問が定期的に会合をもつことになった。このような立場の人物がいない国からはやむをえず，科学技術担当大臣に出席を依頼した。いわゆるお供などは一切同席を許さず，単身その場に臨むべしとのきついお達しで，余りマスコミなどに目をつけられないよう，カーネギー会合と名付けられた。以来12年，会議に出席する人たちの顔ぶれは年々歳々少しずつ変わるものの，連綿と続いている。

ある年の会合で，議長役を務めたブロムレー教授は前からの持論である「ノー・ネクタイ」をとくに強く求めた。いかにもアメリカ人らしく，「この会議では終始，皆ネクタイを外そう，そうすることによってリラックスし，お互いの親密さを増そう」というのがその言い分で，一応，一同それに従った。ところが夕食になった時，イギリスの代表だけがダーク・スーツにきっちりネクタイという出で立ちで現れた。「君，どうしたんだい，この会議はノー・ネクタイだよ」とブロムレー教授。しかし，それに対する英国紳士の答えは次のようなものであった。「われわれは夕食のとき，ネクタイをするのが普通です。だから今，この場で私は，ネクタイをしているほうがはるかに心穏やかで，リラックスできるのです」。一同それを聞いて微笑み，中にはうなずく者もいた。そしてその翌日から，会議の場でもネクタイを付けて来るメンバーがちらほら現れたものである。

多くの国の人々が集まる場合にはとくに，それぞれの文化が異なるためにこうしたエピソードに事欠かない。そのあるものは相手に対する，時には過剰な配慮であり，いろいろな種類の自己主張であり，しかしそれらを越えて，なんとか全体を良い雰囲気にまとめ，良い結果を出さねばとするチェアマンの苦労であったりするが，概して万事，根底に人間らしい暖かさがあれば，皆の納得が得られるようである。こうした組織は健全であり，長続きする。実際にはいろいろな局面が存在しようが，それらは大きく割り切れば「全体と個」という表現に尽きるかもしれない。

今日，日本の社会ではいろいろの面で「個と全体」が問題となり，時には物議を醸し出している。両者はいずれも重要な要素で，どちらも疎略にすることはできない。しかも困ったことに，時として当面の利害は互いに相反することが希ではない。社会保障とても例外ではなかろう。だが，そこにこそ「暖かい，人間の英知」が十分に発揮され，やがて個と全体の間の良きバランスが見付け出されるであろうことを期待している。

森　　亘
（もり・わたる　日本医学会会長）